スポーツ・武道芸道が目指すものについての一考察 ー達人の残した文献の解釈からー

照屋 太郎
スポーツ科学専攻
指導教員 遠藤 卓郎

A Study of a Goal of any sports and Budo, Geido
— Discussions from the books written by the masters of Budo and Geido —

Taro TERUYA

The Purpose of this study was to identify the goal of sport, Budo, and Geido as purported by various masters throughout history, and to discuss the meaning of the goal.

What goals should we set in sports, Budo, or Geido? They appear to have their own goal, regardless of those goals set by the individuals who practice them. It would seem that the masters found the goal many years ago. When an individual is seriously engaged in sports, Budo, or Geido, it may be that the individual`s life goals will be the same as the goal of sports, Budo, or Geido, of which the masters speak.

This research was based on literature that spanned over 600 years, from the fourteenth century A.D. to the present day. The literature review was based upon the works of four masters; Takuan, Munenori Yagyu, Tessyu Yamaoka, & Shinichi Hisamatsu. The four masters have stated that the goal of Budo and Geido is to attain a state of No-Thought-No-Mind. This state has been called "Mushin".

It was this researchers' intention to include in this study that which the researcher himself could understand through his own experiences. Material that could not be understood was not included within this study.

A number of questions were addressed in this study, with particular attention being paid to the following three; 1) Why did the masters leave a message which is difficult to understand? 2) What is the message the masters wanted to convey? 3) What did the masters want to teach us by way of Budo, or Geido?

By reading of master's books, it was clarified that the state of "Mushin" is a state whereby one's experience could be compared with that of an unfettered noble sprits. It was concluded, that Budo and Geido (may be sports, too) share a common thread regarding how we live our lives.

【1. はじめに】

スポーツや武道芸道に取り組むとき、何を目標にしたら良いだろうか。その道には、本来目指されているものがある。人が本当に真剣に取り組むとき、その道の目標は、その者の人生の目標とも重なっていく。生きる理由と重なっていく。何を目指して生きるべきか、何を目指してスポーツに取り組むべきか、何百年も目指されてきたことに学びたい。

本研究では達人らが書き残した伝書を調査した。達人の書を理解するには、著者の力量上限界がある。それを踏まえたうえで体験的に理解し得たことをもとに考察を行った。

体育学では、スポーツ指導や体育、武道芸道が、不動の心-無心の境地-を養うと考えた研究がある。[1)2)3)4)] ただそれらでは、境地のあり様は詳しく語られていない。心理学の立場でもA. H. Maslow[5)]やM. Csikszentmihalyiら[6)]が、無心に近い心理状態を明らかにしてきた。しかしそれらは心理状態としての無心を扱っていて、無心の「境地」ではない。

---

1) 岡部平太(1957)スポーツと禅の話. 不昧堂:東京
2) 前川峯雄(1958)体育学原論. 中山書店:東京
3) 中林信二(1987)武道論考. 中林信二先生遺作刊会:つくば
4) 前林清和, 渡辺一郎(1988)剣道修行過程における心的変容についての一考察ー主として兵法家伝書よりみたるー筑波大学体育科学系紀要. 11. p. 175-186
5) A. H. Maslow(著), 小口忠彦(訳)(1987)人間性の心理学. 産業能率大学出版部:東京他
6) Mihaly Csikszentmihalyi(著), 今村浩明(訳)(2000)楽しみの社会学. 新思索社:東京他

・研究の目的：本研究の目的は、道を登りつめた達人の境地に何があるのかを明らかにすることである。達人がその境地で何を思っていたのか、何を伝えたかったのかを考察した。

・ 考察の立場：達人の残した伝書をもとに考察をした。達人の伝書を読み解く助けに、先行研究も参考にした。

【2. 結果—登りつめたところにある無心の境地】

武道芸道の達人の境地には共通するものがあると言われる。以下の達人の文献でも、その境地は共通している。無心の境地である。

剣術：沢庵禅師、柳生宗矩、山岡鉄舟

茶道：久松真一

2.1 山岡鉄舟 —剣と書の極意—

下は山岡鉄舟が大悟の晩、詠じたという偈である。

論心総是惑心中　　要識剣家精妙処
凝帯輪贏還失工　　電光影裏断春風

心を論ずれば総に是れ心中に惑い
輪贏に凝帯すれば還って工を失す
剣家精妙の処を識らんと要せば
電光影裏、春風を断つ[7]

「あれこれ考える—迷っているからだ。
勝負にこだわれば腕がすくむだけ。
なに？剣の秘訣が知りたいのか。
春風を一気に断ち切る、これだよ。[8]」

山岡の偈は、無学禅師[9]の有名な偈の一部を引用している。それは以下である。

乾坤無地卓孤筇　　珍重大元三尺剣
且喜人空法亦空　　電光影裏斬春風

乾坤、孤筇を卓てる地なし。
且喜すらく人空、法も亦た空なり。
珍重す、大元三尺の剣。
電光影裏、春風を斬る。[10]

偈が詠まれた経緯は以下である。

「鎌倉、円覚寺の開山無学祖元は北条時宗の参禅の師であるが、この無学祖元が中国の温州の能仁寺で、元兵の侵入を避けて坐禅していたところ、元兵が寺内に入りこみ、祖元の頭を斬ろうとした。その時、祖元は顔色一つかえず、泰然自若としてつぎの偈を唱えた。(中略)無学祖元がこの偈を唱えるや、これを聞いた元兵は刀を下ろすことができずにそのまま立ち去ったという。」[10]

沢庵禅師が、柳生宗矩に送った書簡の中で、無学の偈を解釈している。

「鎌倉の無学禅師、大唐の乱に捕へられて、切らるゝ時に、電光影裏斬春風　といふ偈を作りたれば、太刀をば捨てて走りたると也。

無学の心は、太刀をひらりと振り上げたるは、稲妻の如く電光のぴかりとする間、何の心も何の念もないぞ。打つ刀も心はなし。切る人も心はなし。切らるゝ我も心はなし。切る人も空、太刀も空、打たるゝ我も空なれば、打つ人も人にあらず。打つ太刀も太刀にあらず。打たるゝ我も稲妻のぴかりとする内に、春の空を吹く風を切る如くなり。一切止らぬ心なり。風を切つたのは、太刀に覚えもあるまいぞ。」[11]

沢庵の言葉の主旨は、「一切止らぬ心なり。」というところにあって、生死に関する心配にも一切心が止まらない様子、生死の価値観を透脱した様子にあると読むことができる。鈴木大拙は、沢庵の意が「無心」にあると述べている。[12] 生死の価値観も煩悩として切り捨ててしまって、自己の本来の在り方に徹した様子を以って、鈴木は「無心」と言ったと解釈することができる。ここで、生死の価値観を切り捨てるというのは、一つの比喩と思われる。すなわち、最も捨て難い煩悩すらも切り捨てたということであろう。

恐怖も生への執着も切り捨てた無学には、感情の面では死を拒否する理由がなく、だから元兵の剣を無心に受ける覚悟ができたと思われる。

さて山岡の偈は、現代訳を見れば3行目まで簡単に理解できる。難しいのは「電光影裏断春風」の意であろう。この部分に、偈の意味が全て込められていると言って良い。山岡が剣の極意に無学を引用したということは、その極意は無学の無心にあると考えられる。

「両刃鋒を交えて、避くることを須いず」

これは山岡が大悟の前数年間悩んだという公案だ。山岡はこの答えを見つけて、先の偈を詠んだという。剣に囲まれ逃げ場が無い。そのときどうするか。鈴木大拙は、この公案を「無心の状態を道破したもの」[13]と言う。考えて避けると迷い

---

7) 大森曹玄(1983)山岡鉄舟. 春秋社：東京, p. 102

8) 山岡鉄舟, 高野澄(編訳)(1971)剣禅話. 徳間書店：東京, p. 44-45

9) 無学祖元—仏光禅師・円満常照国(1226-1286)臨済宗の僧。1278(弘安元)年、北条時宗の招きで来日、円覚寺第一世。時宗の師。(沢庵, 池田諭(訳)(1970)不動智神妙録. 徳間書店：東京. p. 74 より)

10) 鎌田茂雄(1977)仏陀の観たもの. 講談社：東京, p. 113-119

11) 沢庵, 池田諭(訳). 前掲書. p. 72-75

12) 鈴木大拙(1940)禅と日本文化. 岩波書店：東京, p. 85-86

13) 鈴木大拙(1950)無心ということ. 大東出版社：東

が生じて突きこまれる、と。この公案は、言わば、考えて行動することを超えることを言っているのではないだろうか。沢庵禅師は「一切止らぬ心」と表現した。命が賭けられようと、迷わぬほど、己を知っている。すなわち無学禅師の境地ということだろう。

2.2 茶道家 久松真一における無心

「茶道論」[14]で久松真一[15]は、茶道の目的を次のように述べている。

「茶道の一番の根源、究極の目的は、仏法を得道*1することである。(中略) 外にある仏を対象的に信ずるとか、対象的な仏に向かって三昧*2になるとかいうのではなく、ただ、見性*3すること、自覚すること、それが茶道の目的であります。」[16]

そして久松は、この禅による得道、見性の内容にも触れている。

「禅では、無相の人間ということを申しますが、これは相のない、つまり形のない人間が、真実の人間のあり方だという意味であります。普通われわれは、なんらの形のない人間というようなものを考えることはできない、そのような人間は、普通の人間としては存在しないわけでありまして、人間には必ず形というものがある。この形があるということは、結局、われわれ人間のあり方が何かにこだわっていて自由がないということである。つまり、われわれが何らかの形あるものである限りは、束縛とか繋縛とかいうものをまぬがれることはできない。ですから、われわれが自由になるとか解脱するとかいうことは、形のある人間から形のない無相の人間となることであります。

(中略) このようなものとして自覚された無相の自己が、本当の自己である。つまりは一切の形から脱却した自己、一切の形を否定した自己というものが本当の自己ということになるのであります。(中略) つまり是非・真妄*4・善悪・美醜というようなものはすべて真の自己にはない、そのような形というものはそこには一切ないのであります。そして、その形の一切ないところが、本当の人間であるとか本当の自己であるとかいうことになるのであります。」[17]

上記二つの引用を併せて考えて、久松の言う茶道の目的とは、茶道の実践を通して自己を形のないものにすること、無相の自己すなわち本当の自己を自覚することであると言える。この無相の自己とは善悪・是非・真妄・美醜等、意識によって後付けされた価値一般の一切ない自己であるということである。

2.3 武道と芸道の極意は同一

武道－剣と、芸道－茶の、二つの目指すところを考察してみる。柳生宗矩[18]は心に本心と妄心の二つがあると言う。

「心に本心、妄心とて二つあり。本心を得て、本心の様になせば、一切の事すぐ也。此本心、妄心におほはれてまがりけがれぬれば、一切のしわざまがりけがれぬる也。(中略) 本心と云ふは、本来の面目*5 (中略)

禅は此心を伝へたる宗旨也と承はる所也。(中略) 妄心といつば、血気*6 也、私也。(中略) わが愛する所を人にくめば、怒り恨み、或いは又わがにくむ所を人同じ心ににくめば、悦びをなし、非をまげて理となす。(中略) 是を妄心と云う也。此妄心がおこれば、本心かくれて妄心となりて、皆あしき事のみあらはるる也。然れば、道ある人は、本心にもとづきて妄心をうすくする故に尊し。

無道の人は、本心にかくれ妄心さかんなる故に、曲事のみにして、まがり濁れたる名を取る也。(中略) 妄心は皆、何事をなせども、邪也。此邪の心が出でたらば、兵法も負くべし、弓もあたるべからず、鉄砲もはづるべし、馬ものらるまじ、のふ*7 も見ぐるしかるべし、舞もききぐるしかるべし、云ふ事もあやまりあらはるべし。一切皆たがふべし。本心にか

京, p. 126

14) 久松真一(著), 藤吉慈海(編) (1987) 茶道の哲学. 講談社: 東京, p. 9-65

15) 茶道家、久松真一(1889－1980) 文学博士、元京都大学教授。実父大野定吉は茶人で、幼少からその強い影響を受けた。京都帝国大学哲学科在学中、哲学者西田幾多郎(1872－1945)に師事。卒業後、西田のすすめによって臨済禅の修行に励む。大正7年(1918)より妙心寺に住し、禅修業かたわら学究ならびに茶道三昧の独身生活を送った。(久松真一(著), 藤吉慈海(編). 前掲書より)

*1 悟りをひらくこと。道理をさとること。

*2 (仏教で) 精神を集中し、雑念を捨て去ること。

*3 自己に根源的にそなわる本性を見きわめること。

16) 久松真一(著), 藤吉慈海(編). 前掲書. p. 45-46

*4 妄：まことがない。うそいつわり。でたらめ。

17) 久松真一(著), 藤吉慈海(編). 前掲書. p. 30-33

18) 柳生宗矩(1571－1646) 江戸幕府剣術指南役。柳生新陰流の基本的伝書、兵法家伝書を著した。

*5 真我の我

*6 はやる心、激しやすい心

*7 能

なはば、何事も皆よろしかるべし。(中略)本心にかなはば、兵法は名人なるべし。ありとあるゆる程の事、一つも此道理にはづるべからず。」[19]

上の中に、「本心と云ふは、本来の面目(中略)禅は此心を伝へたる宗旨也と承はる所也。」という部分がある。柳生宗矩は「本心」が禅の伝える心だとする。久松真一の言うように、茶道の背景にも禅があると一般に言われている。だから、兵法家伝書の「本来の面目」は久松の言う「無相の自己」・「真の自己」・「本当の自己」と同じ意味と解釈できる。そして柳生宗矩は、「本心」ならば兵法は名人と述べている。剣術の極意は「本心」になること、と解釈して良いだろう。そして久松真一の言うように、茶道の極意もそこにある。

余計な念を去れという柳生宗矩。本当の自己を自覚せよという久松真一。二つは同じことを別の角度から言っている。本当の自己を自覚するためには、本当でない自己を去らねばならない。そして余計な念を去った本心を「平常心」すなわち無心と言うのだろう。兵法家伝書にも「無心とて、一切心なきにあらず。唯平常心なり。」[20]とある。

柳生宗矩の師、沢庵禅師の書簡も剣を題に「留る所なきを無心と申す」[21]と言う。迷いを全て去り、いつ何が起きても感情に流されない不動の心を言う。今すべきことを悟り抜いた境地を無心というのだろう。

【3. 考察：無心という生き方
達人が伝えようとした本当の目標は何か】

何かの道を登りつめることに、何の意味があるのか。無心の境地に何の意味があるのか。何故、達人は無心の境地を伝えようとしたのか。古来より武道芸道は、型を伝承の媒体として、型を使う師の精神を残してきたと言われる。達人たちが、武道芸道のための心理的技術としてだけ、無心を伝えたとは思えない。

古来、無心の境地を体現した武士や禅僧は、死を恐れなかった。無学禅師もそうであるし、「葉隠」には剣の極意は死を恐れぬこととある。[22]

十二分に生きている。だから、いつ死を迎えても悔いはない。武士や禅僧は、その境地を目指したのではないだろうか。真剣なスポーツ選手には、この境地が理解できるだろう。試合前に、練習をし尽して、もうやるべきことがない。そうならば、試合前も落ち着いていられる。

しかし達人が無心の境地を伝えようとした理由は、これだけだろうか。無心の境地が個人の精神内作用に尽きるものとは思えない。

この問題の答えを示すと思われる説話がある。名刀、正宗と村正

「ある人が村正の切れ味を試そうと思って、水流にそれをおき、上流から流れてくる枯葉にむかって、どうするかを見守った。刃に出会った枯葉は、どれも二つに切られた。彼は、今度は、正宗を立てたが、上から流れてくる木の葉はその刃に触れる事を避けて行った。」[23]

技術の果てに、剣の在り方が問われている。

磨き抜かれたわざは精神を宿す。わざに触れる者はわざに精神を見出す。触れる者にそれぞれの形で。だから達人は、わざを残したのではないかと推察される。千利休の歌に次がある。

茶の湯とは　ただ湯をわかし茶をたてて
のむばかりなるものと知るべし

ただ、湯をわかし茶をたてて飲むだけのこと。一人の思索はいくら偉大な思索でも有限だ。しかし、ただ無心に茶を飲むならば、その茶は無限に深くなる。無心の茶に接したとき、人はそこに主体的にメッセージを見出すだろう…。その無限に深い茶に。

【4. まとめに代えて】

最後に、この無心の境地を頂点とする武道芸道・スポーツが本来目指すものは何か、まとめてみる。達人たちは、本当は何を伝えたかったのか。

昔、筆者がまだプロボクサーになるかならない頃、トレーナーの先生方によく言われた言葉がある。その言葉は真理の一側面を言い当てている。最後の一言は、その時おそらく省略されていた言葉。

「余計なことは考えるな。
一生懸命やっていれば、それでいいんだ。」
あとは道が教えてくれる。

---

19) 柳生宗矩, 渡辺一郎(校注)(1985)兵法家伝書. 岩波書店:東京, p. 94-97
20) 柳生宗矩, 渡辺一郎(校注). 前掲書. p. 58
21) 沢庵(著), 池田諭(訳). 前掲書. p. 63
22) 和辻哲郎, 古川哲史(校訂)(1941)葉隠(下). 聞書第十一 一三三. 岩波書店:東京, p. 206-207
23) 鈴木大拙(1940)禅と日本文化. 岩波書店:東京, p. 66-67